AMCoR
Asahikawa Medical University Repository http://amcor.asahikawa-med.ac.jp/

薬学図書館 (2011.07) 56巻3号:258～261.

≪闘病記研究会シンポジウム≫
闘病文学を素材とする哲学・史学・文学統合教育の実践

藤尾　均

≪特集2：闘病記研究会シンポジウム≫

闘病文学を素材とする哲学・史学・文学統合教育の実践

藤　尾　　均*

[抄録]　筆者は医療系大学で人文系教養教育に携わり，教材の一部として毎年，明治から平成に及ぶ闘病文学を数点選んで活用してきた。本稿ではその実践を踏まえ，合わせて大学図書館長としての立場も踏まえ，蔵書に闘病文学を充実させることの意義深さを示唆する。人文系学問の重要な3本柱は哲学と史学と文学である。闘病文学を教材として活かすために筆者が実践してきたのは，当該文学を核としてこれら3分野を有機的に統合することであり，その成果は上梓した著書の一部に盛り込んだ。闘病文学は無数にあるが，本稿では高浜虚子・夏目漱石・梶井基次郎・室生犀星・荻野アンナの作品を取り上げ，筆者の教育実践を具体的に紹介する。

[キーワード]　闘病文学，医療系大学，人文系教養教育，哲学，史学，文学

1. はじめに

筆者はこれまで20余年にわたり，大学の常勤・非常勤の教員として，医学・看護学など医療系の学生を対象とする人文系の教養教育を幅広く担当してきた。人文系といえば，その柱は哲学・史学・文学であるが，これら3領域は有機的に統合した上で教育すべし，というのが筆者の一貫した信念である。2005年，この信念をもとに，これらを「三位一体」(トリニティー）に統合した講義用テキスト『医療人間学のトリニティー』[1]を上梓した。ここでいう「医療人間学」とは「メディカル・ヒューマニティーズ」の訳語であり，メディカルな（つまり医療上の）諸問題をヒューマニティーズ（つまり人文学あるいは人間学）の手法によって探究する学問といってよい。

本書でいう哲学とは，主として，「いのち」にかかわる倫理を探究する現代の倫理学的哲学，すなわち生命倫理（バイオエシックス）である。筆者らが編集した『生命倫理事典』[2]の内容と有機的にタイアップさせ，医師・患者関係をはじめ，安楽死や尊厳死，脳死と臓器移植など，日本における生命倫理の現状と課題に幅広く言及した。史学の分野では，日本の近代的医療制度が確立され始めた明治時代初期からの医学史・医療史に主眼を置き，それを各時期の社会的背景と絡めて叙述するよう努めた。

そして文学については，同じく日本の近代以降を対象とし，著名作家の作品の中から，患者・障碍者・医師・看護師などが登場するもの，病院など医療現場を舞台とするもの，病気や障碍を主題とするものなど32作品を厳選して抜粋し，読みやすいよう注釈を施して紹介した。医療人や患者・障碍者の普遍的な感情の機微を具体的に捉えることができ，読者の琴線に触れる作品ばかりである。

つまり本書は，文学作品の一節を素材にして医療問題の諸相を具体的に把握し（文学），当該問題の社会的背景を歴史的脈絡の中で捉える（史学）とともに，そこから現代にも通じる哲学・倫理学的課題を汲み取って批判的に吟味し（哲学），ひいては医療の将来を実践的に切り拓くことを意図している。その意図がどの程度まで達成されたかは読者諸賢の御判断にゆだねたい。

* Hitoshi FUJIO
〒078-8510 旭川市緑が丘東2条1-1-1
旭川医科大学歴史・哲学教室
E-mail : kondo@asahikawa-med.ac.jp

2. 教材としての闘病文学の実例

ともあれ，本書で紹介した文学作品の中には，①パターナリズム医療に対する無念の思いを患者の弟の立場から綴った部分を含む高浜虚子の自伝的小説『続俳諧師―文太郎の死』[3]，②胃潰瘍による大量吐血の顛末を綴った夏目漱石の随筆『思い出す事など』[4]，③肺結核患者である作者自身をモデルにした梶井基次郎の遺作『のんきな患者』[5]，④癌闘病の模様をユーモラスな筆致で綴った室生犀星の遺作『われはうたえどもやぶれかぶれ』[6] がある。これらはいずれも，いわば闘病文学であり，順に，明治末期・明治末期・昭和戦前期・昭和戦後期の作品である。

本稿では，筆者が多年にわたって教材としてきた以上4作品に，2年前から新たに教材とした，⑤癌の医療情報の洪水に翻弄される平成期の患者・家族を描いた荻野アンナの作品『蟹と彼と私』[7] を加え，医療系大学の人文系教養教育において闘病文学を素材に哲学・史学・文学統合教育を実践する意義について具体的に提示し，関係者各位の参考に供したい。とりわけ医療系図書館関係者各位には，蔵書の重要ジャンルとしての闘病記・闘病文学の充実をこの機会に是非お願いしたい。なお，以下，引用文中の省略部分は「……」で示すことにする。

3. 闘病文学を素材とする人文系教養教育の実践例

(1) 高浜虚子『続 俳諧師―文太郎の死』[3] (1909年)

実兄をチフスで喪った作者の体験にもとづく自伝的作品である。大病院で兄が受けた医療と死にゆく過程は当時のパターナリズムの典型であった。一部を引用しよう。「『癒（なお）るでしょうか，難しいでしょうか』という質問に対して，『そりゃ君難問だ。医者はベストを尽すのみで，生死の予言は出来ぬ』こう言って……得意らしく笑った。……独り夜半の病室に呻吟して冷刻なる医師，看護婦と争わねばならぬ人は生きる寿命をも殺す人である」。

まず，こうした引用部分から患者・家族の無念の思いに感情移入するのが文学としての課題である。次いで，史学的な観点からは，日本の医療界におけるパターナリズムからインフォームドコンセントへの流れを概観することが重要な課題となろう。最後に，哲学・倫理学的観点からは，世界医師会による「患者の権利に関するリスボン宣言」(1981年採択，1995年修正）をはじめとする，患者の権利に関するさまざまな法令や宣言文の内容を吟味し，医療を志す学生としての自覚を深めることが必須の課題となろう。

(2) 夏目漱石『思い出す事など』[4] (1910年)

かねて胃潰瘍の持病のあった漱石は，1910（明治43）年8月に大量吐血し危篤に陥った。一命を取り留め回復後に綴ったのがこの随筆であり，一種の闘病記録である。危篤の際の彼には，日ごろ想像していたような「臨死体験」がなかった。すなわち「微かな羽音，遠くに去るものの響，逃げて行く夢の匂い，古い記憶の影，消える印象の名残」などがなかった。この事実は彼には却って不可解で，この体験により彼の死生観は大きく転換した。

この作品の場合，いわゆる九死に一生を得た人の体験を追体験することにより，いずれは訪れる自らの「死」に思いを致すのが文学鑑賞の課題となる。そして史学的・哲学的課題は，何といっても「臨死体験」をどう捉えるかである。

歴史的に俯瞰すると，「臨死体験」の証言は平安時代の『日本霊異記』や『日本往生極楽記』に現れ始め，平成期の井上靖のエッセイ『生きる』[8] (1991年雑誌発表）や水上勉のエッセイ『心筋梗塞の前後』[9] (1994年雑誌発表）に至るまで数多く存在する。彼ら現代一流の作家までが揃いも揃って全くの作り話を自身の「臨死体験」として披露したとは到底思われない。国民の「臨死体験」への興味・関心は，立花隆による『臨死体験』[10,11] (1994年）や『証言・臨死体験』[12] (1996年）が起爆剤となったが，このブームよりやや早い時期に井上や水上の体験が発表されていたのは意義深い。ブームに引きずられた結果ではないからである。

哲学的に思索すべきは，多くの人が証言する「臨死体験」の前提としての体外離脱が，果たし

て現実体験なのか，それとも脳内体験なのか，という点である。後者だとすれば体外離脱は，脳内の特定部位に電気刺激が与えられたことによる錯覚，あるいは，俗に脳内麻薬ともいわれる脳内物質エンドルフィンが大量に分泌されたことによる幻覚なのかもしれない（ほかに単なる夢とする説もある）。いずれにせよ，漱石にこそなかったが水上・井上はじめ多くが証言している「臨死体験」なのだから，笑い飛ばすのではなく，合理的な説明づけに努めるべきであろう。自然科学からの新たな照射も待たれるところである。

(3) 梶井基次郎『のんきな患者』[5]（1932年）

これは作者自身の実体験を映した遺作短編であり，末期結核患者の心理が冷静な筆致で描かれている。遺作ながら，決して絶望せず人生を前向きに捉える態度で貫かれている。主人公吉田は，「のんき」というよりは，ジタバタしても仕方がないと達観しているのである。

史学的観点からは，この闘病文学を素材に，結核に対する根本的な治療法がなく非科学的・迷信的な「薬」（脳味噌の黒焼，首縊りの縄など）にすがる患者が少なくなかった時代の空気を理解することが重要であろう。結核を他の治療困難な病気に読み替えれば，現代でも往々にして起こり得る問題となるからである。

文学的に注目すべきは，次の個所などに描かれた結核患者の心の機微である。「吉田は……そういう迷信を信じる人間の無智に馬鹿馬鹿しさを感じない訳に行かなかったけれども，……馬鹿馬鹿しさの感じを取り除いてしまえば，あとに残るのはそれらの人間の感じている肺病に対する手段の絶望と，病人たちの何としてでも自分のよくなりつつあるという暗示を得たいという二つの事柄なのであった」。

哲学的観点からは，非科学的・迷信的医療と現代のEBM（根拠に基づく医療）との見極めについて具体的に思索することが重要な課題となろう。

(4) 室生犀星『われはうたえどもやぶれかぶれ』[6]（1962年）

作者の実体験に基づく遺作闘病文学である。犀星は，入院先では肺癌とは知らされず胸膜炎と告げられた。その経緯は室生朝子『晩年の父犀星』[13]（1998年）に詳しい。真相の「告知」はなかったが，本人は肺癌であることを薄々「察知」していたらしい。それはとりわけ遺作の次の文章から推察される。「一つの断崖のような処に押しつけられ，行かねばならない処が次第にわかって来るようであった。自分の行先がわかり始めたのだ」。文学的観点から学ぶべきは，病気との付き合い方もさることながら，病院における医療スタッフと患者との人間関係の機微である。

哲学的にポイントとなるのは，病名告知，とりわけ癌告知の是非の問題であろう。上述のように犀星は，真相は「告知」されなかったが薄々「察知」していたらしい。当時はまだ癌告知は一般的ではなかったが，かねてから犀星は癌告知を必要と考えていた。犀星研究者である星野晃一の『室生犀星　創作メモに見るその晩年』[14]によれば，犀星が1957（昭和32）年に発表した『行列の先にいる人』の登場人物はこう語る。「ひとかどに生き抜いた人間はガンだと言われても，ガン発生から死ぬまでの三四箇月を生きられるだけ生き抜く，最後の希望さえ生じてくるのだ。……何の病いで死ぬのか判らない程，不可解な悲しみはない筈です。何十万人という人間は何も知らずに死んでいる，そのくやしさは何十万人の人間に聞いて見なくとも，判るような気がするのだ」。日本はおろかアメリカでさえインフォームドコンセントという概念が一般的でなかった時代に，すでに犀星は「告知」の悲痛な叫びをあげていたのである。

この事実を受けて歴史的に考究すべきは，今日のように癌告知が一般化するまでの歴史的経緯である。国立がんセンターの開設は犀星が亡くなった1962（昭和37）年であり，「対がん十カ年総合戦略」により癌の本態解明が推進され始めたのは死の22年後，1984（昭和59）年のことである。この戦略が効を奏し，癌が必ずしも絶望的な病気ではなくなってきて初めて，癌告知はタブーでなくなり始めた。やがて医療現場では癌告知は当然の前提となり，告知した後のケアにこそ万全が期されるようになってきた。ちなみに，この発想転換が国民に広がる際に起爆剤となった本は，季羽

倭文子『がん告知以後』[15]（1993年）であろう。

(5) 荻野アンナ『蟹と彼と私』[7]（2007年）

英語で癌を意味するcancerは，元来は蟹のことである。確かに蟹の甲羅の硬いデコボコは癌のすがたに似ている。この闘病文学では，「私」の同居人「彼」が食道癌にかかり，それが肝臓に転移する。犀星の場合とは異なり，この作品では冒頭から患者には癌が告知されている。ふたりは抗癌剤・サプリメント・代替医療などに関する情報の洪水に押し流されそうになる。「本屋の棚の，健康コーナーの前に立つと，抗がん剤の反対派と賛成派の本がごっちゃに並んでいる。反対派いわく，ほとんどの癌に効き目がないのに副作用のみ強烈。たとえ一時的に効いて，癌が退縮しても完治せず，結局のところ寿命は延びない。賛成派いわく，抗がん剤の配分や点滴の時間帯を工夫すれば，副作用は抑えられる。あとは吐き気などで，ほとんど苦痛もないまま，寿命は延びる。両方を熟読玩味した患者や家族は，迷いの底なし沼に沈み込む」。

この作品を通しては，氾濫する情報に翻弄される患者および家族の心の葛藤に思いをはせるのがまず文学的な観点からの最大課題である。次いで歴史的には，このように医療情報過多の時代を迎えるまでのメディア発達の経緯を振り返っておくことが重要であろう。

最後に，哲学的に吟味すべきは以下の点であろう。昭和までの時代は，おおむね癌は告知されないまま患者は死を迎えた。家族には癌を隠すことへのストレスが伴った。一部の患者は（犀星のように）察知しつつ死を迎えたが，そういう患者には，察知したことを家族に悟られまいとするストレスが伴った。ところが平成の現代では，告知後の情報洪水こそが患者にも家族にもストレスを惹起している。癌患者を取り巻くストレスは質的に変化した。とはいえ，ストレスはストレスである。そもそも癌はストレスが誘発するともいわれる。人は癌にまつわるストレスからは永久に逃れられないのか。なんとも皮肉な現実である。解決策はどこに見いだされるのであろうか。

引用・参考文献

1) 近藤　均．医療人間学のトリニティー．東京，太陽出版，2005，639 p.（ISBN 9784884694517）（著者姓は藤尾の旧姓）
2) 藤尾　均ほか編．新版増補 生命倫理事典．東京，太陽出版，2010，1552 p.（ISBN 9784884696672）
3) 高浜虚子．俳諧師 続徘徊師．東京，岩波書店，1952，218 p.（ISBN 9784003102831）
4) 夏目漱石．思い出す事など 他七篇．東京，岩波書店，1986，189 p.（9784003101162）
5) 梶井基次郎．檸檬・冬の日 他九篇．東京，岩波書店，1985，255 p.（ISBN 9784003108710）
6) 室生犀星．蜜のあわれ・われはうたえどもやぶれかぶれ．東京，講談社，1993，318 p.（ISBN 9784061962248）
7) 荻野アンナ．蟹と彼と私．東京，集英社，2007，256 p.（ISBN 9784087748727）
8) 井上　靖．石濤．東京，新潮社，1994，173 p.（ISBN 9784101063355）
9) 水上　勉．心筋梗塞の前後．東京，文藝春秋，1997，224 p.（ISBN 9784167118129）
10) 立花　隆．臨死体験 上．東京，文藝春秋，1994，448 p.（ISBN 9784163492605）
11) 立花　隆．臨死体験 下．東京，文藝春秋，1994，472 p.（ISBN 9784163492704）
12) 立花　隆．証言・臨死体験．東京，文藝春秋，1996，248 p.（ISBN 9784163522005）
13) 室生朝子．晩年の父犀星．東京，講談社，1998，290 p.（ISBN 9784061976085）
14) 星野晃一．室生犀星 創作メモに見るその晩年．東京，踏青社，1997，220 p.（ISBN 9784924440357）
15) 季羽倭文子．がん告知以後．東京，岩波書店，1993，224 p.（ISBN 9784101023168）

（原稿受付け：2011.5.21）